

レッスン、授業の延長線上に在るもの

准教授 白井 康雄

はじめに

大学で学生を相手にしてレッスンや授業に携わって長い年月が流れた。「時の流れ」とは一体何であろうか、「永遠」とは何か、この答え様のない問いから音楽的何かを考え出す事はできないであろうか。また、時の流れと共に私の音楽に対する考えはいかに変化したであろうか。この様な問いを自分自身に投げかけた時、最近は聖書からの例えを引き合いに出し、考え、話し、教えることが多くなったように思う。そこで、聖書の言葉から得た音楽的発想、想像がいかに自分の中で展開し広がっていったか、自分なりの考えをまとめてみることにした。この試みは、私の個人的な「音楽的思想の歩み」であり、また私のレッスン、授業を良しとし、熱心に学んでくれた学生、卒業生、そして私を支えてくださった方々へ、感謝の意をこめた総括である。

時の流れ —— アルファとオメガ

我々人間は、時の流れに支配されざるを得ない運命を担っている。それは、時の流れを意のままに操ることはできない、と言うことである。我々の音楽は、演劇同様その操ることのできない時間の経過とともに存在する芸術であるが、その支配されざるを得ない時の流れに流されながらも、いかに音を乗せて行くか、奏して行くか、いかに台詞を語って行くか、この様にしてコントロールされた時の流れ、「如何に」を重ね合わせながら人間は生き、そしてその流れの中から何かを学んでいくのである。なんと素晴らしいことであろうか。その精神、それはいかに流れに乗るか、「いかに生きるか」という、人間共通の永遠のテーマに対する答えでもあり、「人生は一つの芸術である」所以であろう。

ところで、我々個人、一人々々の人生は短くはかないかもしれない。しかし人類全体の流れはとうとうたる大河の流れである。そこで、「時の流れ」とは、「永遠」とは何か、答え様のない問いをカトリック教会に求めてみよう。

カトリック典礼の頂点である「復活祭」、この復活祭に向けて行われる「光の祭儀」は、万物の時を、悠久の時を私に示唆し、私は年間の典礼において最も荘厳な印象を受ける。

この祭儀において、司祭はキリストを象徴する復活の大蠟燭を祝福する。その際に、「キリストは、きのうときょう はじめと終わり アルファとオメガ、 時間も 永遠も、彼のもの 栄光と支配は彼に 世々とこしえに。 アーメン。」と唱えながら、大蠟燭に「十字架」と「A・アルファ」、「Ω・オメガ」さらに「年号」を鉄筆で刻んでいく。そして香粒で十字架上に、キリストが受けた5箇所(5箇所)の聖なる傷を意味する印を付けながら、「その聖なる 栄光ある傷によって、 私たちを支え、 守ってくださる 主キリスト。アーメン。」と祈り、復活の大蠟燭に灯をともし、「輝かしく復活したキリストの光が、心のやみを照らしますように。」と祈りを結ぶ。

それから「光の行列：キリストの光、神に感謝。」へと移って行く。

「A・アルファ」はギリシア語アルファベットの最初の文字、そして「Ω・オメガ」は最後の文字である。この始めと終わりは「時間と空間」を示し、時間と空間があるために、物事には限界が生じてくる。もしこの限界を超越することができれば、すべてのものは完成することになる。

では、時の流れに支配されざるを得ない運命を担っている人間の「生」から、時間と空間を取り去るとどうなるであろうか、もちろん「死」に至るわけである。しかしこの論法でいけば、死は時間と空間を超越するわけであるから、完成を意味し、完成故に終止ではなく、死は復活、「永遠」へとつながることになる。

作曲家オリヴィエ・メシアン（Olivier Messiaen 1908~1992）は著書「わが音楽語法」における「不可能性の魅力」の中、「非逆行リズム」で「時間」を見事に把握し音楽で表現している。これは左から読んでも右から読んでも同じ音価が持続する群を置く技法で、その中心部分の音に現在の「私」が存在し、その前にも永遠があり、その後にも永遠がある、とメシアンは考えていたのであろう。私はこれを限りなく美しいと感動している。

思えば、私の人生全てはこの復活の大蠟燭を祝福する祈りの中に含まれている。そして時間、空間と共に存在する音楽も同様である。

答え様のない問いの存在、故に私は祈る！

答え様のない問いの存在 II

時の流れには人間の意志が介在され得ない時と、介在が可能な時の二つがあり、演奏は人間の意志が介在され得ない時の流れの上に、人間の意志が介在した時の流れを重ね合わせた行為、と言えるのではなかろうか。言い方を変えれば、「永遠」の時の流れに乗った、永遠と共存する限りある時間的行為である。さらに考えを推し進めて行くと、永遠とは、限りある時間の終わりなき時、ではなく、まったく違った次元に存在する時の流れであろう。そこに神は存在する。

再び答え様のない問いをカトリック教会に求めてみよう。

初めに、神が「混沌」から天地を創造されたのは、「光あれ。」の御言葉であった。神は光を見て良しとされ、光と闇を分け、夕べがあり、朝があった。これが第一の日である。また新約聖書のヨハネによる福音書では、

「初めに御言葉があった。御言葉は神と共にあった。御言葉は神であった。御言葉は初めに神と共にあった。すべてのものは、御言葉によってできた。できたもので、御言葉によらずにできたものは、何一つなかった。」（ヨハネ1・1~3）と御言葉について記されている。ここでヨハネの語る御言葉とは、イエス・キリストを指しているのであるが、私はカトリック教徒なので、「御言葉は人となりわたしたちのうちに住みになった。わたしたちはその栄光を見た。」（ヨハネ1・14）という普遍的真理の重さを常に感じて生きている。しかし音楽を研究している者としての思い入れで、御言葉を音声、「音」という様に変化させ、自己流に拡大解釈し、仏教の「阿吽」、バラモン教、ヒンドゥー教など、インドの思想で聖音と

される「オーム・Ω」の響き同様、世界は音の波動（Vibration）から誕生した、と個人的に思っている。これはあくまでも音楽を研究している私の個人的な「音」に対する思いであるが、私にとっては真理である。

では真理とは、さらにヨハネによる福音書を続けて行く。

「御言葉のうちに命があった。この命は人間の光であった。光は闇の中で輝いている。闇は光に打ち勝たなかった。」（ヨハネ 1・4-5）と続き、神である御言葉を賛美している。

御言葉のうちに命があった。人間は生命維持の為に食事をする。はたして食べて生きていれば人間であろうか、人が人らしく生きるためには、何らかの精神的活動がなければ生きているとは言えないのではないだろうか。言葉の中に在る意味、生命観、世界観、それはそのまま音楽に、演奏に通じてくる。楽譜を単に音に置き換えれば音楽であろうか。

この御言葉を再び音に置き換えると、「音のうちに命があった。この命は私の光であった。光は闇の中で輝いている。闇は光に打ち勝たなかった。」これが長年ピアノを弾き続けてきた私の音に対する真理である。そして、楽譜上に無駄な音は何一つなく、演奏においては必ず何らかの意味付け、理論的にあるいはまた精神的に、音一つ一つに対して表現されるべきであると考えている。

世界の起源は「音」からと、我思う、ゆえに我あり、
我存在の幸せを神に感謝、故に我祈る！

時間と空間 —— 音楽の精神

世界の起源は「音」からとし、もう少し、時間と空間における音を考えてみたい。

人間の「生」から空間を取り去ると死に至る。さらに時間を取り去ると「無」、つまりゼロになる。0次元、それは点である。点とは、厚みも無ければ広さも無く、長さすらも無い。唯存在だけが在るのみである。その点が移動した軌跡が「線」となる。点も線も平面上に書き記すことはできない。そして線が移動して「面」となり、さらに面が上下に移動して「空間」となる。我々人間はその空間、地球上、つまり3次元の世界に生きている。がしかし、空間移動で生活が成り立っていることを考えると、実際には4次元の世界であろう。

ここで楽譜を見てみる。時間は左から右へと横方向に流れて行く1次元の世界である。また、音の高低は縦方向に記され、これもまた1次元の世界である。この1次元の世界にある秩序を求めるなら、方向、位置、距離の3つであろう。この3つの秩序を時間の横方向に関して考えると、リズムそして拍、音高の縦方向に関しては音程そしてハーモニーが考えられる。では音楽の3要素の1つであるメロディーは何処に存在するであろうか、メロディーが存在する為にはこの縦と横を組み合わせた2次元の世界を必要とし、そのことにより音の揺れ動きが可能となる。こうして楽譜ができ上がり、我々は楽譜から音楽の精神を読み取る。

ではその音の精神はいったい何処に、どの様に存在するのであるだろうか。

音の発生は光同様「点」から、つまりゼロ「0」次元から始まり、発音と同時に瞬時に

して4次元の世界に達する。音はその4次元の世界を人間の精神を媒介として風のように漂い、小宇宙を形成する。その過程は、振動、音波といった音響物理学の対象から、聴覚器官、脳に関する聴覚生理学の分野を経て、音感覚としての音響心理学へと達する。我々のもっぱらの対象は、この最終段階である心理的現象、「音感覚としての音」である。

大ピアニスト、アルトゥル・シュナーベル (Artur Schnabel, 1882~1951) は「ピアニストは音を2度聴く。つまり出す前と、出した後の2度である。」と語った。どのような意味を持つ如何なる性質の音か、音を出す前にピアニストの耳はすでに音を想像して聴いている。そして音を出し、その後いかに変化すべきか、いかに次の音につなげていくか、音の変化を聴いている。これは人間の意志が介在した、コントロールされた時の流れであり、まさにピアノのテクニックの原点である。私はここに音楽の精神の存在を確信している。

もう一度ヨハネによる福音書を見てみよう。

「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこに行くかを知らない。」(ヨハネ3・8) 「風」と「霊・気・精神」はギリシア語では同じ「プネウマ(pneuma)」、ヘブライ語の「ルーアッハ」も同様で、神の意志を運ぶとされている。また、ラテン語では「スピリトゥス (spiritus)」で、そこから派生して spirit (英語)、esprit (フランス語)、spirito (イタリア語) などの言葉が同様の意味を持ち、聴く耳を持つ人の心から心へと、4次元の世界を飛翔する。

我祈る！ Veni Creator Spiritus 聖霊来たり給え

以上、時と音に対する私の思い巡らしたことを述べてきたが、次にレッスン、授業に対しての思い出に触れておきたいと思う。

大学におけるレッスン、授業をふり返って

我々が大学で学ぶ音楽は西洋音楽である。その学習の中心は、17世紀半ば頃のバロックから古典、ロマン派を経て、19世紀終わりの近代に至る約250年間に作曲された曲であり、これらの曲には技法上での共通した特徴がある。すなわち、長調と短調による和声的音楽という共通点であり、それ故に厳密な理論化が可能である。

私がレッスン、授業において常に心がけたことは、演奏あるいは音楽を語る時、雰囲気、感覚的に終始する、抽象的な話しではなく、「大学の講義は理論的裏付けの基行われるべきである。」を信念とし、理論的裏付けに基づいた演奏解釈の具体的なレッスン、講義を行ってきた。その基としたのは、レオニード・クロイツァー (Leonid Kreutzer, 1884~1953) が解析した移り行く演奏家の精神過程、「直感、理解、幻想、即興」であった。

レッスンではこれら4つの段階において、何らかの意見を述べてきたが、それらを端的に言えば、音楽の3要素であるリズム・メロディー・ハーモニーの詳細な分析による演奏法の研究であったと思う。特に理解での段階が中心で、この部分における内容の質と量が次の段階、幻想、即興に影響を及ぼし、これらの段階における世界を左右する結果となる。

もちろん理解、幻想、即興の過程を何度も行き来する事もあるわけだが、以下に指導上、特に難しいと思われた問題点をあげて見る。

リズムに関しては、拍子、拍感。そしてシンコペーションのリズムが持つ生命、躍動感の表現。メロディーに関しては、メロディーの書かれ方とフレーズ構造。そして、アゴーギクやルバートの揺れ動き、および流れの方向性。さらにイントネーションとそれに伴う音色、色彩感。また拍子、拍感。ハーモニーに関しては、和声進行におけるエネルギー関係による音色、色彩感。およびカデンツ形成の在り方等が指導上特に難しいと思われた。さらにこれらが音楽的精神からのテクニックと緻密に、複雑に関連してくるので、教える側、教わる側ともに非常な忍耐を必要とした。

しかし忍耐にも限界があり、上手く表現できないフレーズに対し、「命の息を吹きかけて」(創世記 2・7)、またある時、拍感のない演奏に対しては、「この年になると、私にとって拍子の第 1 拍目は、十字架の重さと同じくらいの重さがあると思うようになった。」等の話をし、音楽的想像の世界を引き出すことに努めた。この様な話になった時、学生は非常に熱心に耳を傾け、興味を示し努力したが、私自身も学生同様に、創世記における、神が人を創造された愛、愛のためにイエスが十字架を背負い、ゴルゴダの丘を登って行った真実の重さを思いつつ、私自身の人生における、音楽と十字架の重さ故の幸せに法悦と浸り、神に感謝した。

祈りと共に、私のレッスン、授業は在った！

祈り —— 時の完成

より良い授業でありたい。学生に、より上達して欲しい。人は思いを祈りにかえる。

時として目的を見失い、錯雑した感情を病む学生に出会う事があった。

「何のためにピアノを弾くのか分からなくなった。」「このままピアノを弾いていて良いのかと思う。」と気持ちが落ち込んでしまった状態である。

私には答え様がなく、「より良い人間になる為に。」、としか言えなかった。

無力な私は祈った。祈りに主イエス、聖母マリアの生涯を重ね合わせていくうちに、

「わたしは主のはしためです。おことばどおり、この身になりますように」(ルカ 1・38) と答え、自らを神に差し出したマリアの苦難な生涯を思いうかべながら、私は最近、人生の主人公は「私」ではなく、神にあると思える様になってきた。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を生み

その名をインマヌエルと呼ぶ。

神が我らと共におられるのだから。(イザヤ 7・10-14, 8・10)

旧約、数千年の歴史を経て、天使ガブリエルより伝えられた主のお告げ、この「受胎告知」のできごとの中に、神が行った「時の完成」、人間救済への愛の計画を見、また「アヴェ・マリア (マリアへの祈り)」、「マニフィカト (マリアの讃歌)」の祈りを聴くことがで

きる。

主よ 私をあなたの御前に居る者としてください！

音楽とは

「音楽とは」、それは「愛」である。

聖パウロの書簡に書かれた、愛の深遠な思想をここに書き留めておく。この言葉の中に、音楽、演奏における、いやそれ以上に生きることに対しての叡智を、我々は読み取ることができる。

愛

たとえ、人間の不思議な言葉、天使の不思議な言葉を話しても、
愛がなければ、わたしは鳴る銅鑼、響くシンバル。

たとえ、予言の賜物があり、あらゆる神秘、あらゆる知識に通じていても、

たとえ、山を移すほどの完全な信仰があっても、

愛がなければ、わたしは何者でもない。

たとえ、全財産を貧しい人に分け与え、

たとえ、称賛を受けるために自分の身を引き渡しても、

愛がなければ、わたしにはなんの益にもならない。

愛は寛容なもの、慈悲深いものは愛。

愛は、ねたまず、高ぶらず、誇らない。

見苦しいふるまいをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人の悪事を数え立てない。

不正を喜ばないが、人とともに真理を喜ぶ。

すべてをこらえ、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐え忍ぶ。

愛は、けっして滅び去ることはない。

予言の賜物ならば、廃れましょう。不思議な言葉ならば、やみましょう。

知識ならば、無用となりましょう。

われわれが知るのとは一部分、また、予言するのも一部分であるゆえに。

完全なものが到来するときは、部分的なものは廃れ去る。

われわれは、幼い子どもであったとき、幼い子どものように語り、

幼い子どものように考え、幼い子どものように思いを巡らした。

だが、一人前のものになったとき、幼い子どものことはやめた。

われわれが今、見ているのは、ぼんやりと鏡に映っているもの。

「その時」に見るのは、顔と顔を合わせてのもの。

わたしが今、知っているのとは一部分。

「その時」には、自分がすでに完全に知られているように、
わたしは完全に知るようになる。
だから、引き続き残るのは、信仰、希望、愛、この三つ。
このうち最も優れているのは、
愛。

(一コリント 13)

終わりに

これまで、レッスンや授業を通して私個人の思ってきたこと、考えてきたことである「聖書から受ける音楽的発想・想像」をまとめてみた。この試みは私がピアノを弾く限り、いつの日か帰天する時まで続く大きな課題となるであろう。これら個人的なことは、取るに足りない、あまりにも小さきものの集積かもしれない。しかし人類全体の歴史はとうとうたる大河の流れであり、音楽は、音はそれ以前、創世記に神の御言葉と共にすでに存在していたものである、と私は信じている。その私は永遠の時の流れの中、ある一点として存在し、やがてフレーズが広がる様に始まり、そしてまた閉じつつ点となり、永遠と同化していくのであろう。音楽もまた同様である。音楽と共に在った私の人生、迷いは多かったが真実、幸せであり、これからもそう在り続く。神に感謝！